

研究ノート

中髙年女性のパーソナル・ネットワーク

——別居子との関係性を中心に——

吉田愛梨¹⁾・鯉坂 学²⁾

要約：伝統的な直系家族制度にもとづく「家」規範の近年の弱体化は、日本の家族形態を変化させ核家族化の進行を促した。そして、その影響は高齢者を含む家族構成にまで及び、高齢者の単身世帯および老夫婦のみ世帯数を増加させた。この結果、同居子を頼ることのできない高齢者は親族や近隣、友人による共助と各種の社会福祉サービスを組み合わせることによって、さまざまな社会関係から日々のくらしの援助を受けるようになった。そのなかでも、高齢者の生活を支えるうえで特に重要視されてきたのは、離れて暮らす別居子の存在である。本稿では、京都市右京区太秦学区に居住する中髙年女性を対象に実施した質問紙調査のデータを用いて、中髙年女性のパーソナル・ネットワークの実態を明らかにすることを目的としている。中髙年女性と別居子との関係抽出には、分析枠組みとしてソーシャル・サポートの概念を用いた。その結果、太秦に居住する中髙年女性の別居子は、男女を問わずその母親との地理的な近接性を保持し、接触頻度が高く、中髙年女性、とりわけ65歳以上の高齢女性の別居子に対するサポート期待度もきわめて高い傾向にあることが明らかになった。

キーワード：パーソナル・ネットワーク、中髙年女性、ソーシャル・サポート、別居子、京都市右京区

目次

1. はじめに
2. 研究課題
 - 2-1. 既存研究の整理
 - 2-2. 問題背景
3. 調査概要
 - 3-1. 調査地域の概況
 - 3-2. 調査方法
 - 3-3. 分析対象者の基本属性
4. 分析枠組み
5. 中髙年女性と別居子との関係性
 - 5-1. 別居子との関係性を抽出する意義
 - 5-2. 別居子の特質

1) 同志社大学大学院社会学研究科社会学専攻博士前期課程

2) 同志社大学社会学部教授

*2015年10月16日受付、2015年10月19日掲載決定

- 5-3. 別居子の距離と接触頻度の効果
- 6. 世代別ソーシャル・サポート期待度
- 7. 考察と今後の課題

1. はじめに

日本社会が抱える大きな問題のひとつに高齢者問題がある。「平成 27 年版高齢社会白書」によると、65 歳以上の高齢者人口は 2014（平成 26）年 10 月 1 日現在で、男性 1,423 万人、女性 1,877 万人、総計 3,300 万人となり、総人口に占める高齢者の割合が 26.0% と過去最高の数値を示している（内閣府 2015）。全人口のおおよそ 4 人に 1 人の割合で高齢者を抱える日本社会が直面している課題は数多く、社会保障や福祉による生活援助、介護施設や介護士の慢性的な不足などその諸問題を列挙すれば限りがない。そのなかから本稿では、「家」規範の弱体化や家族構成の変化がもたらした「高齢者の単身あるいは老夫婦のみ世帯の増加」⁽¹⁾という課題に焦点をあてる。そして、従来の「老人扶養」（那須・湯沢 1970）の視点に代わり重要視されてきた「個としての老人（高齢者）」（前田尚子 1988: 59, 安達 1999: 19 など）という視点に立脚することで、多くの高齢者が直面する脆弱な世帯内資源への代替機能を果たしうる、社会関係のあり方について検討したい⁽²⁾。

まず、高齢者を取り巻く状況がいかに変容してきたのかを簡単に見ておこう。直系家族制度の下、「家」規範が色濃く残る時代には、3 世代同居が一般的で同居子が老親の面倒をみるのが当然のことと認識され、当時の高齢者研究の視点も「老人扶養」に限定されていた（森岡清美 1997）。それが 3 世代同居率の減少と単身および老夫婦のみ世帯の増加といった世帯構成の変化をはじめ、農村部や地方小都市から大都市圏への都市移住による世帯分離などが生じたことで、高齢者は同居子に頼ることが以前よりも困難になった。離れて暮らす別居子に頼ることも可能であるが、近居であっても日常的な接触がなければ援助を期待できないかもしれないし、遠居であれば緊急時を除いては頼ることすら難しいだろう。そこで注目されてきたのは、「高齢者を支える多様なネットワークや地域の重要性」（安河内 2008: 243）である。

しかし、近年の高齢者をめぐる学術的な研究動向は、こうした高齢者の立場に準拠した社会的な状況とは相反するように、「社会福祉」への傾倒が顕著である。1990 年代の一連の「社会福祉基礎構造改革」の影響を受けてのことか、安達も指摘するように「主として介護・ケアに特化したものは活発となっている一方で、逆に家族や親族との関係や生活に焦点をあてた論考はむしろ少なくなる傾向」（安達 2010: 13）にある。

高齢者に限らず、人は地縁、血縁、職縁などに基づく個人間あるいは、個人と組織間などのさまざまな社会関係を形成、維持しながら日々の暮らしを送っているが、こうし

た多様な「つながり」が個人のライフスタイルや生きがいなどに与える影響は、計り知れない。介護やケアの在り方を探求し議論することも重要であるが、本稿では高齢者の幸福感や QOL（社会的な生活の質）に直接的に多大な影響を与えられとされる、個人と個人の親しい紐帯に焦点をあてた「パーソナル・ネットワーク」⁽³⁾の実態を、郵送質問紙調査の結果に基づく統計的データを用いて捉えることで、今日の高齢者を取り巻くパーソナルな社会関係がいかに蓄積されているのか、その実態の一側面の解明を試みている。

ところで、人間関係や個人のネットワークを測定することには困難がともなう。なぜならそれは、「不可視なものであり、物理的な強弱の測定、あるいは質の定義づけが不可能」(安田 2011:7) だからである。そこで本稿ではパーソナル・ネットワークの機能的側面である「ソーシャル・サポート」⁽⁴⁾の概念を用いて、①高齢者のサポート・ネットワークを、②別居子（息子や娘）との関係性に注目しながら分析を進めていく。なお、「ソーシャル・サポート」の概念については4章にて詳述する。

2. 研究課題

2-1. 既存研究の整理

パーソナル・ネットワークの実証研究が日本で盛んに行われ始めたのは1980年代以降のことであるが、その経緯を理解するには1930年代の北米にて初期シカゴ学派の議論から端を発した一連の「コミュニティ論」を概観する必要がある。

当時の北米社会では都市化の進行に伴う近代的な交通・通信手段の発達が著しかった。その結果、人々は海外あるいは地方や農村部から都市部へと流入し、都市は社会階層や人種、民族、年齢、学歴、出自などを異にするさまざまな人々が集積する場と化した。このような状況から L. ワースは、「都市化」は都市における個々人の接触を直接的で対面的な「第一次的」関係から、間接的な「第二次的」関係に変貌させ、地域コミュニティを衰退、喪失させると指摘した (Wirth 1938=1965)。こうした初期シカゴ学派による議論の展開からまもなく、戦後のシカゴ学派によるコミュニティ研究や、H. J. ガンズ (Gans 1962=2012) をはじめとする多くの都市社会学者たちは、社会変動下での第一次的紐帯はかならずしも衰退したわけではないとする「コミュニティ存続論」を提唱し、質的な実証研究によって近隣・親族などの第一次的紐帯の連帯は依然として繁茂し続けていることを明らかにした。

以上二つの並行する議論とは別に、従来のような地縁・血縁・職縁を起因とした強い紐帯ではなく、個人は潜在する多くの「弱い紐帯」(Granovetter 1973=2006) のなかから、少数の強い紐帯を選択的に形成、維持しているとする議論の展開もみられる。野沢

によれば、このような見解は、現代の都市住民が近隣・親族の連带的コミュニティのみに内包されているわけでも、コミュニティを完全に消失しているわけでもなく、親族・非親族の多様な関係を含む、空間的に分散し、枝分かれした構造のネットワークのなかに暮らすようになったと主張する B. ウェルマンの「コミュニティ解放論」(Wellman 1979=2006)に重なるといえる(野沢 2008:40)。こうした一連の流れを汲んだ結果、個人の第一次的紐帯、すなわちパーソナル・ネットワークの構造解明に向けた実証研究が各地に広まることとなり、日本にもその波が及んできたのである。

今日のパーソナル・ネットワーク研究は北米にて C. S. フィッシャー (Fischer 1982=2002) が実施した人的結合の詳細な内面分析によってその研究スタイルが確立された。その後の日本での研究群も調査方法や分析視点など多くの点で北米の先行研究を踏襲している。とりわけ、コミュニティ内部における人的結合の原理として、親族、近隣、職場仲間関係に加え、友人関係の構造を取り入れたフィッシャーの視点は高く評価され(たとえば奥田 1993:11)、パーソナル・ネットワーク研究の発展に多大なる影響を与えてきた。

日本での実証調査にいち早く着手した都市社会学者の大谷信介(1995)は日本の都市と地方都市の比較対象として、人間関係のとり結び方の違いに焦点を当てた分析を試みている。その特徴としては、C. S. フィッシャー (Fischer 1982=2002) による北カリフォルニア調査や B. ウェルマン (Wellman 1979=2006) によるトロント・イーストヨーク調査などとも比較することで、北米と日本のパーソナル・ネットワークの相違点を明らかにしようとしている点があげられる。調査は松山、四国(松山・高松・徳島・高知市)、中四国(広島・岡山・松山・宇和島・西条市)に居住する20歳以上の男女を対象に1987年から89年の3年に渡り実施されている。

この実証調査を契機として他の都市社会学者たちは次々と研究に着手するわけであるが、その対象は、大都市の都心部や地方中核都市の市街地への偏りがみられる。(金子 1993, 松本 1995, 森岡清志 2000 など)。他方で、より小規模な地方都市や農村部への調査研究の必要性も主張されてきたが(大谷 1995:151)、「パーソナル・ネットワーク」に特化した地方小都市や農村部での実証研究は、『村落社会研究』において農山漁村住民の社会関係を分析視点とした一部の事例研究の蓄積がみられるが⁽⁵⁾、総体的で複合的なネットワークの構造、すなわち人間関係の領域間の関連分析を試みたものは、野邊(2006)を除いては見当たらない。ただし、過疎地に居住する老親と都市部に流出・移動した別居子との関係性に焦点を当てた実証研究は存在する。鯉坂は広島県北部で実施した調査により、都市へ移住した別居子(論文では「他出家族員」と記述されている)との日常的な交流が、それぞれの過疎地域で暮らす高齢者(老親)にとって大きな援助になっていることを明らかにしている(鯉坂 [1992] 2009:150)。そこでは「パー

「パーソナル・ネットワーク」という用語こそ用いられていないが、高齢者の親密な社会的ネットワークを抽出している点で、大いに参考になるであろう。

「個としての高齢者」の実態を捉えるには、家族社会学や老年社会学、地域社会学といった研究領域の垣根を越えた、重層的な視点からの研究遂行が求められている。そしてこうした研究動向が今日の高齢者のパーソナル・ネットワークを対象とした実証研究の特徴といえよう。

2-2. 問題背景

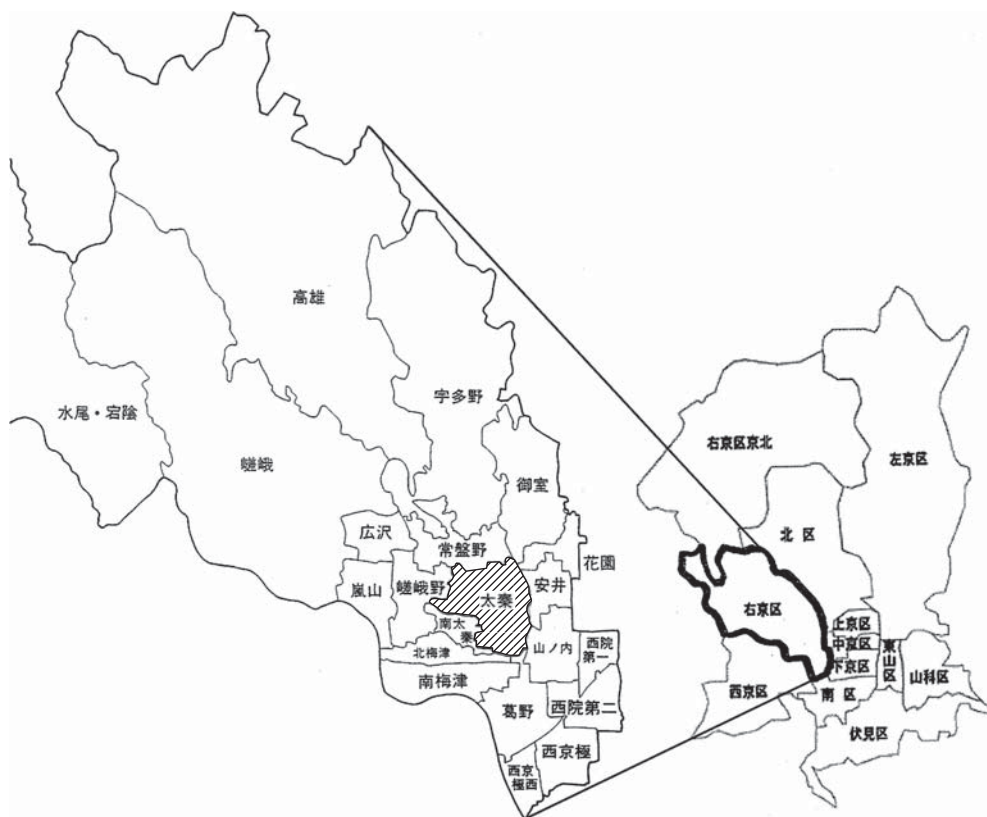
日本全国にみられる高齢者問題だが、京都市も例外ではない。京都市総合企画局によると 2015（平成 27）年 9 月 15 日現在推計の総人口 146 万 8,080 人に占める 65 歳以上人口（39 万 1,870 人）の割合が 26.7% となり、人口・高齢化率ともに過去最高を記録した。また男女別では、65 歳以上の男性 16 万 6,420 人（高齢化率 23.9%）、女性 22 万 5,450 人（高齢化率 29.2%）で、女性の人口の多さと高齢化率の高さが際立っている（京都市 2015）。

京都市を構成する 11 の行政区は、その地域的特性から上京・中京・下京・東山の都心 4 区と南・左京・北の旧郊外地域、伏見・右京・西京・山科の新郊外地域におおよそ分けることができる（鯉坂 2008）。京都市は地方中核都市のなかでも、その特殊性や地域的特性から研究対象として注目されやすい。しかし、その多くが中心市街地の分析に焦点を絞っているか、あるいは郊外地域が対象であってもその観光資源や伝統産業の調査研究に特化している。京都市内に居住する地域住民の関係性に焦点を当てた研究はいくつかみられるが（たとえば上田 1976、田中 2008、小松 2008 など）、それらの対象はすべて都心 4 区に集中している。したがって、地域住民を対象とした従来の実証研究では脚光を浴びることのなかった、京都市内の郊外地域を本稿の調査対象地域とする。

3. 調査概要

3-1. 調査地域の概況

京都市を構成する 11 の行政区のうち、都心 4 区を除いた 7 つの行政区が郊外地域に該当する。本稿の調査対象地域である「太秦」（うずまさ）は、京都盆地西部に開けた右京区に位置しており（図 3-1）、旧右京区役所や移転後の新総合庁舎が所在するなど、行政区の中心的機能を担ってきた地域である。面積は 1,547 km²、人口総数 19,802 人（男性 9,087 人、女性 9,995 人）、総世帯数 8,202 で（2010 年国勢調査結果より）、右京区内随一の人口規模を誇っている。学区内には JR、地下鉄、市バス、路面電車などが



出所：統計区地図（京都市地域統計要覧所収）をもとに筆者作成。

図 3-1 右京区の学区別詳細図（左）と京都市の 11 行政区区域図（右）

乗り入れ，中心市街地や京都駅へも 30 分とかからず，そのアクセスの良さから，郊外住宅地として人気を博している⁽⁶⁾。この学区は東映太秦映画村や広隆寺などの観光スポットもいくつか内包し，地方の郊外住宅地としては全国的な知名度がかなり高いといえよう。

太秦学区は歴史的背景からさらに 3 つの地域へと区分することが可能である⁽⁷⁾。それは，①1931（昭和 6）年に太秦が京都市に編入されるまでの葛野郡「太秦村」としてすでに存在していた旧村落地域，②京都市編入時に実施された区画整理によって戸建の郊外住宅が急増した地域，そして，③2003（平成 15）年から 2008（平成 20）年の間に実施された再開発事業により，ファミリーマンションが相次いで建設されたことで，人々の流入が急増した地域である⁽⁸⁾。

このような特色をもつ太秦学区を調査対象地域として選定したのは，筆者の出身地でもあり，土地勘や地域住民との交流があるのはもちろんのこと，再開発事業等により急激な変貌を遂げた「まち」の姿を地域住民の視点から静観してきたためである。

3-2. 調査方法

本論では、2014年8月から9月にかけて京都市右京区太秦学区に居住する1934（昭和9）年8月1日以降生まれ（抽出時点で80歳未満）から1969（昭和44）年7月31日以前生まれ（抽出時点で45歳以上）の女性住民を対象に実施した、郵送法による質問紙調査データを用いた分析を行う。

性別を女性に限定したのは2つの理由がある。まず、平均寿命や高齢者の占める割合、高齢者の単独世帯数などの指標のすべてにおいて女性が男性を上回っているため、我が国の高齢期女性は、高齢期が長く配偶者の死後にひとりで老後をおくる可能性が高いことが示唆される⁽⁹⁾。したがって、こうした高齢期女性にとって社会関係や居住コミュニティは、日常、非日常を問わずなんらかの援助を受ける際に重要な役割を果たしうると考えられる。もうひとつの理由は、男女間のネットワーク形成の特色にみられる相対的な相違に基づいている。「コミュニティの解放化は空間的には男性に、構造的には女性に当てはまる」（松本 1995: 80）⁽¹⁰⁾とされており、地域を基盤とした分散的なネットワーク形成を概観するには、後者に対象者を絞ることは妥当であると思われる。なお、男性は女性と比較すると、職場仲間と同居家族以外の社会関係を保持しにくいことから、地域に根差した社会ネットワークの弱さが指摘され、調査研究の緊急性を要すると考えられる。ただし、本稿はあくまでも「中年期および高齢期の母親と、別居する子どもとのサポートの構造」の把握を目的としており、男性のパーソナル・ネットワークの構造については今後の研究課題としておきたい。

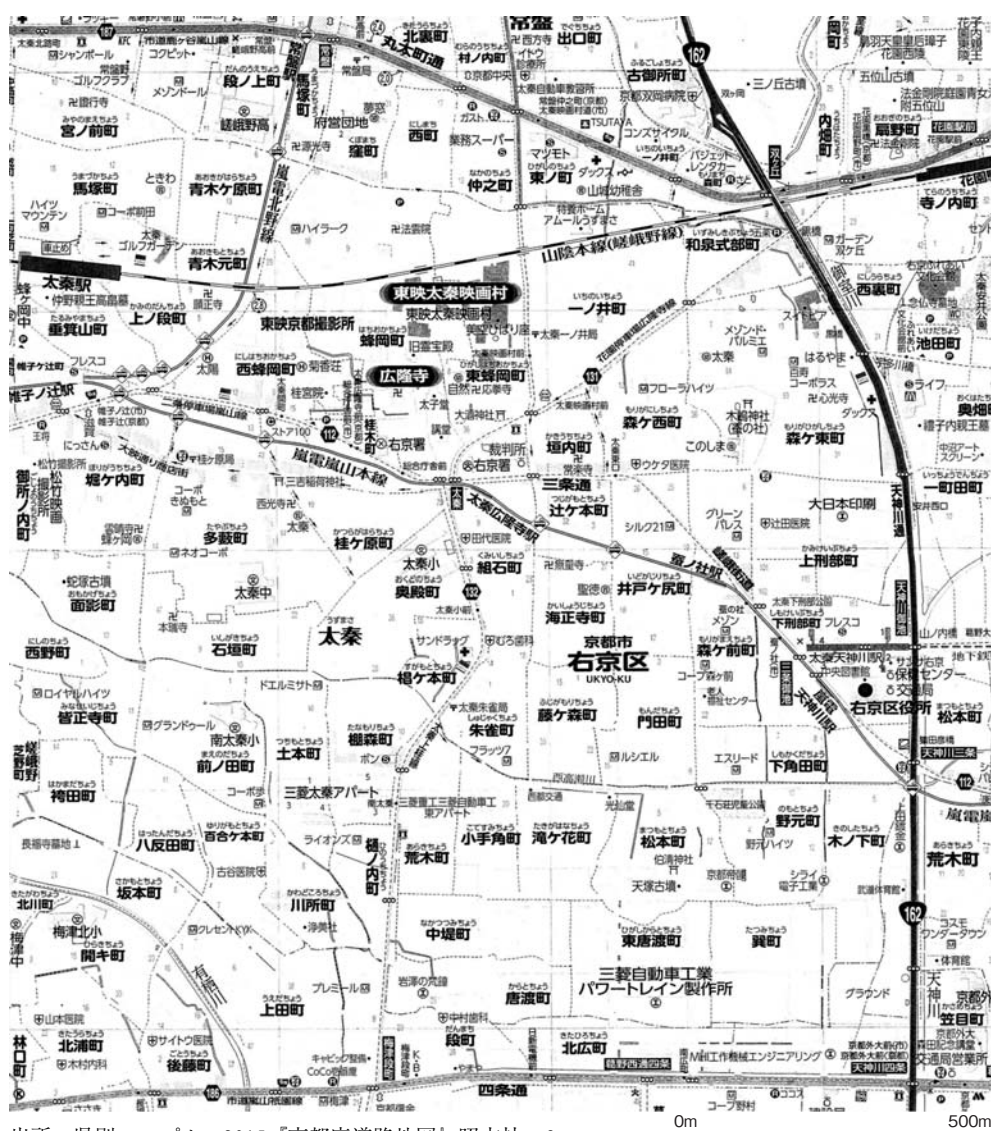
調査対象者の抽出には以下の手順をふんでいる。まず、関西地図協会が発行する「京都市右京区詳細図－太秦学区区域図」をもとに太秦地域にある37の公称町から対象とする22の町を選定した（表3-1）。選定基準としては、①一つの町内で2学区以上にまたがっているものを除外し、②町の大部分を撮影所や工場、その他の企業施設が占めている地域も除外とした。つぎに、対象地域である19の町に居住する対象者から選挙人名簿を用いて、5人に1人の等間隔抽出によって計500人を抽出した。そして、それらの中でマンションの多い3つの町に居住する対象者を、住民票を用いて4人に1人の等間隔抽出によって計100人抽出し、選出された計600人が本調査の対象者である⁽¹¹⁾。郵送した調査票のうち、宛先不明で6名分の調査票が戻ったため最終対象者は594人となり、そのうち有効回答者数は227人で、有効回答率は38.2%となった。

調査票では、①回答者自身に関すること（問13～問18）、②近所付き合い（問1～問6）、③ソーシャル・サポート（問7～問11）、④町内会・自治会への加入（問12）、⑤別居子との関係（問19～21）についての質問項目を設けており、本稿で扱うのは主に①と③、⑤の項目である。なお、③のソーシャル・サポートについては、それぞれのサポート課題に対し、該当する選択肢、すなわち手助けを期待できるすべての社会関係に

表 3-1 調査対象 22 町一覧

町名	度数	有効パーセント	町名	度数	有効パーセント
一ノ井町	20	8.9	森ヶ西町	5	2.2
和泉式部町	7	3.1	垣内町	4	1.8
朱雀町	15	6.7	辻ヶ本町	2	0.9
組石町	11	4.9	井戸ヶ尻町	12	5.3
桂ヶ原町	10	4.4	森ヶ前町	17	7.6
奥殿町	14	6.2	上刑部町	6	2.7
梶ヶ本町	8	3.6	門田町	7	3.1
面影町	20	8.9	藤ヶ森町	8	3.6
石垣町	2	0.9	多藪町	19	8.4
桂木町	1	0.4	下刑部町	5	2.2
森ヶ東町	17	7.6	下角田町	15	6.7

N = 225



出所：県別マップル 2015『京都府道路地図』昭文社 p9

図 3-2 右京区太秦学区とその周辺詳細図

丸をつけるよう指示された質問項目であることを断っておく。調査票および単純集計結果については巻末を参照されたい。

表 3-2 本調査の回答者の年齢（5 歳階級）別の構成比（国勢調査結果との比較）

	回答者		国勢調査 (2010 年)
	度数	%	%
45-49 歳	28	13.1%▼	15.7%
50-54 歳	23	10.8%▼	13.2%
55-59 歳	29	13.7%▼	14.5%
60-64 歳	32	15.0%▼	17.0%
65-69 歳	37	17.4%△	16.5%
70-74 歳	41	19.2%△	13.0%
75-79 歳	23	10.8%△	10.3%
合計	213	100.0%	100.0%
欠損値	14		

注：国勢調査の結果は、調査対象である 22 の町の合算値。△は、2010 年の国勢調査の結果より本調査の回答者のほうが割合の高い層。▼は、国勢調査の結果より本調査の回答者のほうが割合の低い層。

表 3-3 標本特性（N=227）

（単位：人）

住宅		出身地	
戸建の持家	172 (75.8%)	太秦学区内	18 (7.9%)
戸建の借家	5 (2.2%)	右京区内	24 (10.6%)
分譲の集合住宅	34 (15.0%)	京都市内	65 (28.6%)
賃貸の集合住宅	2 (0.9%)	京都府内	27 (11.9%)
NA/DK	14 (6.2%)	近畿圏内	30 (13.2%)
		その他	50 (22.0%)
		NA/DK	13 (5.7%)
世帯構成		居住年数	
単身世帯	17 (7.5%)	3 年以下	13 (5.7%)
夫婦のみ世帯	82 (36.1%)	4 年以上 15 年未満	40 (17.6%)
核家族世帯	79 (34.8%)	15 年以上 35 年未満	93 (41.0%)
母子世帯	7 (3.1%)	35 年以上	67 (29.5%)
2 世代世帯	5 (2.2%)	NA/DK	14 (6.2%)
3 世代世帯	13 (5.7%)	平均居住年数	25.61 年
その他	11 (4.8%)		(標準偏差 14.48)
NA/DK	13 (5.7%)		
職業（現職）			
被用者（管理職）		2 (0.9%)	
被用者（常雇で非管理職）		15 (5.7%)	
被用者（公務員）		3 (1.3%)	
被用者（非常雇）		51 (22.5%)	
自営業・家族従業員		23 (10.1%)	
無職		120 (62.9%)	
NA/DK		13 (5.7%)	

注：世帯構成の核家族世帯は「夫婦と未婚子のいる世帯」を、母子世帯は「回答者と未婚子のいる世帯」を、2 世代世帯は「回答者（もしくは回答者夫婦）とその老親の同居世帯」を、3 世代世帯は「回答者（もしくは回答者夫婦）と子ども夫婦＋孫の同居世帯」および「回答者（もしくは回答者夫婦）とその子ども＋老親の同居世帯」を表している。

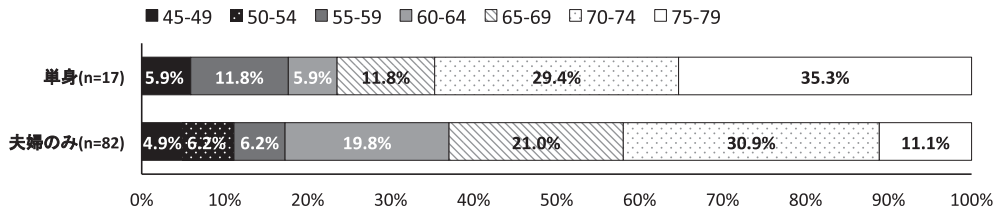


図 3-3 各年齢階級が単身世帯および夫婦のみ世帯に占める割合

3-3. 分析対象者の基本属性

対象者の平均年齢は 62.6 歳で、年齢階級別にみると 65 歳から 74 歳までの女性の回答がやや多く、国勢調査の人口と比べてもその割合が高い（表 3-2）。その他の基本属性は表 3-3 に示すとおりである。出身地は同一学区、行政区内を含めた京都市内出身者が全体の 47% を占めており、近畿圏内まで範囲を広げると 7 割を超えていることから、近距離移動経験者が比較的多いと考えられる。単身世帯と夫婦のみ世帯を合計すると、全体の 4 割を占め、年齢階級別にみると 65 歳以上の高齢者層の占める割合が高いことから（図 3-3）、高齢者を含めた世帯構成の日本全体の傾向と重なることがわかる。一方、従来は一般的であった 3 世代同居家族数は全体の 1 割にも満たない結果となった。職業については、一部パート・アルバイト他、自営業を営んでいる回答者がみられるが、多くは無職（主婦・年金生活者含む）である。平均居住年数は 25.61 年で、65 歳以上の高齢女性の場合は 32.45 年、45 歳から 64 歳の女性の場合は 19.56 年であった。

4. 分析枠組み

既存研究では、ソーシャル・サポートの授受に焦点をあて、個々の高齢者が他者と取り結ぶ社会関係の析出を試みているものが多い（前田尚子 1988, 野邊 2006 など）。サポートの種類としては情緒、手段、情報、評価、介護的サポートなど多彩な研究がなされているが、本研究では手段的サポート、情緒的サポート、危機的サポート、介護的サポートの 4 種類に限定する。また、ソーシャル・サポートには予期、実績、評価の 3 次元の区別（野口 1991）があるが、「何らかのサポートを期待できる」という意識が安心感を与えるうえで重要と考えられるため、予期（期待）サポートに限定して調査を実施している⁽¹²⁾。具体的には、手段的サポートとして「家具の移動などの 1 時間くらいの手助け」と「病気で寝込んだ時の 2 週間の手助け」、情緒的サポートとして「意気消沈した時の相談」、危機的サポートとして「震災や台風などの災害時の手助け」、そして介護的サポートとして「老後、体がきかなくなった場合の手助け」を期待できる相手を尋ねている。

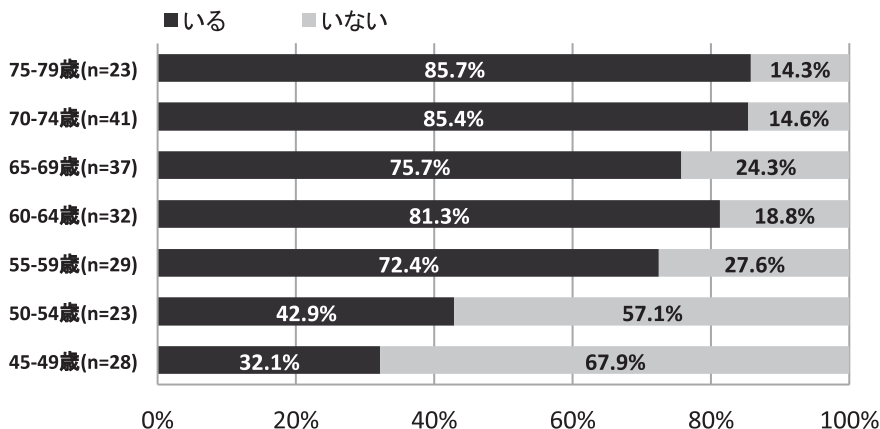
なお、ソーシャル・サポートには受領と提供 2 つの側面があり（野口 1999）、中年

女性は自身や配偶者の両親をはじめとした高齢者へのサポートを提供する立場にある場合が多いと考えられる。また、高齢者にとっても他者へのサポート提供が、生きがいやQOLの向上につながるという論点から注目されつつあるが、本稿では受領サポートの期待度に限定して、分析を進めることとする。

本稿の分析と記述の論点は、次の2つの視点から、各社会関係別ソーシャル・サポートの期待度を検証したものに絞っておきたい。第1の論点は、「中高年」というライフステージにおける別居子との関係性である。親が老年期にある場合、体力や経済力の優る子どもに対して親は依存的になる（前田尚子 1988）。しかし、その依存の度合いは別居子との空間的距離や接触頻度、親密度、性別などによって異なることが推測される。こうした別居子をめぐる諸要因が中高年女性の社会関係にどのような影響を与えているのかを検討していく。なお、ここでは対象者を「別居子の有無」で区別し、一人でも別居子がいると答えた回答者に分析対象を絞ることとする。

留意点はつぎの2点である。別居子との接触頻度を測定するための項目として、彼・彼女らの親元への帰省回数を尋ねているが、手紙や電話、メールといった通信機器を媒介とする接触については尋ねていない。さらに、図4-1にみられるように、40歳代後半から50歳代前半の女性は、その他の年代の女性に比べ、別居子がいると答えた人の割合がかなり少ないため、この分析結果はおおむね50歳代後半以上の対象者に偏ることとなる。

第2の論点は、対象者を45歳以上65歳未満と65歳以上80歳未満とに区分し、中年女性と高齢女性の比較分析を行う視点の導入である。高齢者を対象としたネットワーク研究は急速に展開しつつあるが、分析視点が高齢者だけに偏っているために、「加齢による社会関係の変化」といった視点が見落とされてきたという指摘がある（野邊



注:カイ二乗検定1%水準で有意差あり。

図4-1 年齢階級別別居子の有無状況

1997:84)。そのため、本稿では調査対象者を高齢者層と中年者層に分けることで、異なる世代間の回答者が取り結ぶ社会関係に変化がみられるか否かを検討したい。なお、中年者層と高齢者層をどの年齢で区分するのは議論の余地があるが、本稿では今日の官庁統計に準じて 65 歳以上の対象者を高齢女性とし、それ以下の 45 歳以上 65 歳未満の対象者を中年女性とする。

5. 中高年女性と別居子との関係性

5-1. 別居子との関係性を抽出する意義

同居家族に次いで別居子が高齢者にとって重要なサポート提供者であることは言うまでもないだろう。他方で、80 年代後半以降の諸研究では、高齢者にとって非親族によるインフォーマルなサポート・ネットワークの重要性が増大していることがすでに実証されてきたが（前田尚子 1992, 金子 1993 など）、サポート提供主体としての別居子の存在は、依然として大きいことも実証されている（横山ほか 1994, 安達 1999, 野邊 2006, 鯨坂 2009 など）。本調査結果からも、別居子へのサポート期待度が高いことは明白である（表 5-1）。しかし、伝統的な研究群は横山ほか（1994:119-120）や野邊（2006:232）が指摘するように、別居子を一つのカテゴリーとして、一括して取り扱うことが多かった。つまり、息子や娘といった性別や別居子の居住地に代表されるような「個々の別居子の属性」の影響は看過されがちであったといえる。

こうした経緯のもと、横山ほか（1994）は別居子の属性の重要性を明らかにするため、1988 年に都内の 2 つの公団賃貸住宅に居住する单身および老夫婦のみ世帯の老人 688 人を対象とした訪問面接調査を実施している。調査結果からは、別居子の性別と距離が老親との関係成立に有意な影響を及ぼしていることが実証された。また、横山らの分析視点を踏襲した野邊（2006）の高梁市での調査結果からも、別居子の性別と距離は

表 5-1 ソーシャル・サポートの対象別期待度

N=215

	別居子	親戚	近隣	友人
【手段的】				
家具の移動など、一時間程度の手助けを頼める	70.7%	22.2%	19.8%	24.2%
病気で 2 週間程度寝込んだときに手助けを頼める	78.0%	39.2%	18.7%	28.2%
【情緒的】				
落ち込んだときに相談に乗ってもらう	70.5%	33.5%	18.1%	63.3%
【危機的】				
震災、台風、災害時に手助けを頼む	82.2%	43.3%	50.7%	37.7%
【介護的】				
老後、体がきかなくなった時に手助けを頼める	77.9%	21.1%	13.6%	11.7%

注：別居子については、別居子がいる回答者（n=158）のみを対象とした。

老親－子関係に大いに影響を与えていることが析出されている。

これらの先行研究を踏まえて、本章でも老親－子関係を別居子の属性別に検討してみたい。こうした分析視点は、中高年女性の実生活により即した社会関係の実態把握に有効であると考えられる。なお、高齢者と別居子との関係性に影響を与えていると推測される別居子の個人属性は数多く存在するが、本稿では先行研究に準じて性別と距離を取り上げるほか、親子間の接触頻度にも着目することとする。

5-2. 別居子の特質

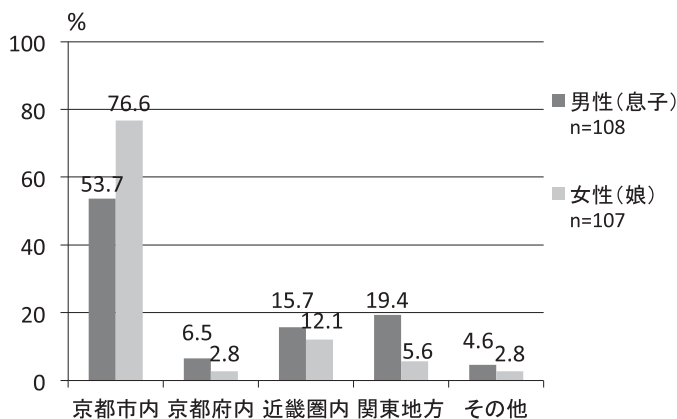
回答者の別居子の基本属性を検討すると（表 5-2）、男女比に大差はないが年齢には 30 代から 40 代への偏りがみられる。これは図 4-1 で示したとおり別居子をもつ回答者の年齢が比較的高齢者に集中していたためと考えられる。また、居住地をみると京都市内に半数を超える別居子が在住しており、他出した息子や娘との空間的距離が比較的近い回答者が多い。居住地を男女別にみると娘の京都市内在住の割合が顕著に高く、一方の息子も市以外の府内およびその他の居住地と比較すると、市内在住の割合が高い傾向

表 5-2 別居子の基本属性

（単位：人）

性別		居住地	
男性（息子）	143（51.8%）	京都市内	156（57.1%）
女子（娘）	133（48.2%）	京都府内	13（0.5%）
年齢		近畿圏内	47（17.2%）
29 歳以下	46（16.7%）	関東地方	35（12.9%）
30～39 歳	85（30.8%）	その他	31（11.4%）
40～49 歳	103（37.3%）		
50 歳以上	22（0.8%）		
平均年齢 38.35 歳（標準偏差 7.80）			

N = 276



注：別居子が複数いる場合はもっとも近くに居住している別居子のみをカウントした。

図 5-1 男女別別居子の現住地

にある。ただし、息子の現住地は娘よりも近畿圏内や関東地方、その他の県へと比較的散在していることがわかる（図 5-1）。

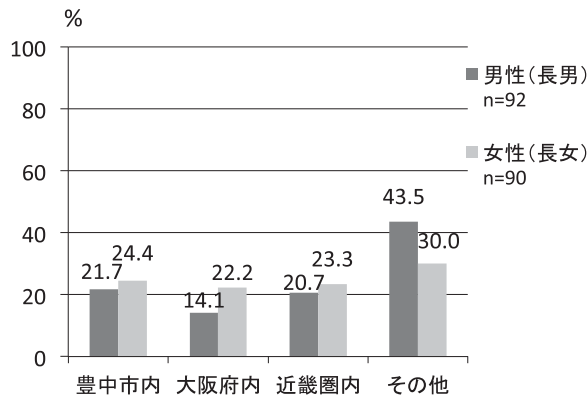
参考までに、本調査と同じ質問紙を用いて 2013 年に大阪府豊中市の千里ニュータウン住民を対象に西川由希子（2014）が、愛知県豊田市足助（あすけ）町住民を対象に前田瑠依（2014）が実施した調査との比較検討をおこなうこととしよう⁽¹³⁾。

データ検討の前に調査対象地域の概況を簡単に述べておく。大阪市の北に位置する豊中市は、都心まで電車でわずか 20 分という利便性の高さから、郊外住宅地として発展してきた。調査が実施された千里ニュータウンは、1960 年代に豊中市と吹田市にまたがる地域に建設された日本で最初の大規模なニュータウン（1.160 ha）である。住宅地は、約 41% を占めており、戸建住宅と集合住宅地がほぼ同じ規模で混在している。人口は 1975（昭和 50）年の約 13 万人をピークに減少傾向が続いていたが、近年の集合住宅の建て替えにともなう居住者数と世帯数の増加により、2012（平成 24）年には人口約 94,000 人、世帯数約 43,000 世帯まで増加している。入居時には 30 歳代～40 歳代の働き盛りの層が中心であったが、定住者が多い千里ニュータウンの現在の特徴としては高齢化の進行があげられる（西川 2014）。

つぎに、愛知県豊田市足助町の地域概況を記しておく。現在の足助町は、1955（昭和 30）年に 1 町 3 村の合併により誕生した旧足助町が、2005（平成 17）年の平成の大合併により、周辺 5 町村とともに豊田市に編入された地域である。特徴として、1970 年に過疎地域に指定され、高齢化率は 37.8%（2015 年 9 月 1 日現在）に達するなど、深刻な少子高齢化現象があげられる（豊田市ホームページ）。足助町地区はその特性から 4 つの地域に区分できるが、調査が実施されたのは、そのなかでも特に過疎化の進行が著しい 2 つの地域、山々が連なる谷あい に点在する集落を包括した地域と、水系が豊かで田園地帯が広がる地域である（前田瑠依 2014）。

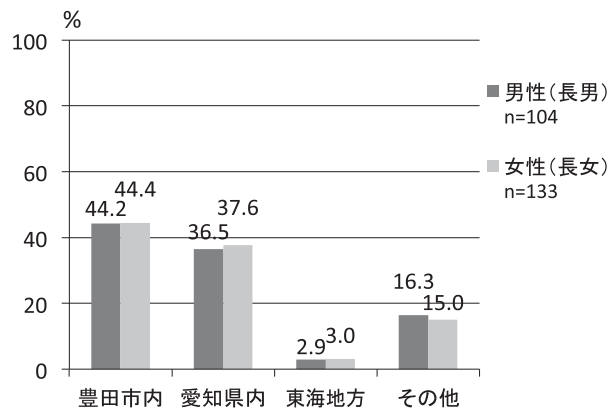
さて、千里ニュータウンでの調査結果から見てみよう。この地域が大阪市という大都市圏の郊外住宅地という点では、地方大都市の郊外住宅地である太秦と類似した地域的特性をもつと考えられる。しかし、両調査における回答者の別居子の現住地には大きな差異が確認できた。千里の回答者の別居子は長男・長女ともに豊中市内在住者が 20～25% 程度にとどまり、大阪府内在住者を足し合わせても長男 35.8%、長女 46.0% にしか満たず、関東などその他の地域での居住が多い（図 5-2）。

では、足助町での調査結果はどうだろうか。図 5-3 は千里での調査結果と同様に、調査対象者の別居子の現住地を男女別に示している。性別にかかわらず、同一市内に居住する別居子をもつ回答者の割合は 4 割程度と、千里ニュータウン調査（図 5-2）よりも高い割合を示しているが、太秦と比すればそこまで高いとはいえないだろう。ただし、同一県内まで居住地の範囲を広げるとその割合は男女ともに 8 割を超え、太秦調査より



出所：西川由希子（2014）の千里での調査結果をもとに筆者作成。

図 5-2 千里ニュータウン調査の男女別別居子の現住地



出所：前田瑠衣（2014）の足助での調査結果をもとに筆者作成。

図 5-3 足助調査の男女別別居子の現住地

も高くなっている。

なお、太秦調査の分析ではすべての別居子を対象としているのに対し、千里・足助調査ではその分析を長男・長女に限定している点や、大阪市と京都市では同じ政令指定都市といえども人口量や大都市としての機能など、さまざまな側面で異なる性格を持っている点など、単純比較はできないことを明示しておかなければならない。それでも、依然として太秦住民の別居子との地理的近接性が男女ともに高いことは特性のひとつとして捉えてよいのではないだろうか⁽¹⁴⁾。

さて、以上3地域の比較検討から、京都市右京区太秦に居住する中高年女性の別居子は、比較的親と近いところに居住している傾向がみられることが明らかとなったが、こうした特徴は親子の関係性に何か影響を与えているのだろうか。表 5-3 は離れて暮らす別居子の帰省頻度を居住地別に検討したものである。分析時には帰省回数の多い順に3つのグループに分け、1年間に10回以上帰る層を高頻度層、3回から10回未満の層を中程度層、1～2回しか帰省しない層を低頻度層とした。また、年間1度も別居子の帰

省がない場合には「なし」と記している。

全体を見ると、別居子が高頻度で帰省すると答えた人の割合が高いが、これは別居子の京都市内在住者の構成比がかなりの割合を占めているため、その影響を大いに受けている結果であると考えられる。こうした分析の限界があることを踏まえて、別居子の現住地と帰省頻度のおおまかな傾向を検討してみよう。居住地別でみると比較的近い京都市内に別居子をもつ回答者ほど、別居子が頻繁に帰省すると答えていることが読み取れる。他方で、標本数が少ないため、慎重にならざるをえないが、別居子の現住地が近畿圏内・関東地方と親元から遠ざかるにつれて、帰省頻度が低くなる傾向も同表から確認できる。

つぎに、別居子の現住地と帰省頻度を男女別に検討してみよう（表 5-4）。全体の傾向として、高頻度で帰省する別居子をもつ回答者の割合が高いが、高頻度で接触する層のみに着目すると、その割合は息子の高頻度層よりも娘の高頻度層のほうがやや高い傾向にある。これは娘よりも息子の現住地が関東地方や近畿以外のその他の都道府県へ分散しており、帰省回数の少ない低頻度層が一定数存在するためであろう。注目すべきは、京都市内に居住する別居子の割合は男女間において大差がみられないことである。

表 5-3 別居子の現住地と帰省頻度

	京都市内 (n=113)	京都府内 (n=6)	近畿圏内 (n=15)	関東 (n=19)	その他 (n=4)	全体 (N=157)
高頻度	76.1%	66.7%	20.0%	15.8%	25.0%	61.8%
中程度	15.0%	33.3%	60.0%	31.6%	50.0%	22.9%
低頻度	6.2%	0.0%	20.0%	47.4%	25.0%	12.7%
なし	2.7%	0.0%	0.0%	5.3%	0.0%	2.5%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

注：別居子が複数いる場合は、もっとも近くに居住、あるいはもっとも帰省頻度が多い別居子のみ算出。

表 5-4 別居子の現住地別にみる帰省頻度（男女別）

		京都市内 (n=56)	京都府内 (n=7)	近畿圏内 (n=17)	関東 (n=21)	その他 (n=5)	全体 (N=106)
息子	高頻度	80.4%	57.1%	17.6%	4.8%	0.0%	50.0%
	中程度	16.1%	42.9%	64.7%	33.3%	40.0%	30.2%
	低頻度	1.8%	0.0%	17.6%	57.1%	60.0%	17.9%
	なし	1.8%	0.0%	0.0%	4.8%	0.0%	1.9%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		京都市内 (n=78)	京都府内 (n=3)	近畿圏内 (n=13)	関東 (n=6)	その他 (n=3)	全体 (N=103)
娘	高頻度	74.4%	66.7%	53.8%	16.7%	66.7%	68.0%
	中程度	20.5%	33.3%	38.5%	50.0%	33.3%	25.2%
	低頻度	2.6%	0.0%	7.7%	33.3%	0.0%	4.9%
	なし	2.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%
	計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

質問紙の自由記述欄には、「毎日」や「週に1回以上」別居子が帰ってくると答えた回答者も多く、別居子の性別を問わず対面的な接触頻度の高さが際立っている。

5-3. 別居子の距離と接触頻度の効果

前項にて、太秦に居住する中高年女性と別居する息子、娘双方との接触頻度はやや高く、居住地の地理的近接性も高い傾向にあることが明らかになったが、この2つの変数、すなわち別居する息子や娘の現住地と帰省回数の間には正の相関がみられたため、別居子が近居なほど帰省回数が多くなり接触頻度が高まることを確認しておきたい⁽¹⁵⁾。

さて、こうした別居子の特徴は、母親である中高年女性の別居子へのサポート期待度にとどの程度の影響を与えているのだろうか。表5-5は、それぞれのサポート課題に対し、別居子からのサポートを期待できると答えた回答者の割合を、別居子の帰省頻度別に検討したものである。同表を詳細にみていくと、高頻度で帰省する別居子をもつ回答者の多くはサポートの種類を問わず、その援助を別居子に期待していることがわかる。とくに病気の時や災害時、あるいは老後といった比較的必要とするサポートの度合いが大きい課題ほど、別居子の援助を期待している回答者が多い。他方で、別居子の帰省頻度がそれほど多くない中程度層、あるいは年間1,2回程度しか帰省しない低頻度層へのサポート期待度は前者に比べると低調である。

つぎに、別居子の性別が親子間関係に与える影響を検討してみたい(表5-6)。なお、調査表では長男、次男、三男、長女、次女、三女とそれぞれ別々に別居子の属性を尋ねているが、性別による効果を測定するため、これらの変数を息子と娘にまとめている。したがって、同じ性別の別居子を複数もつ場合は、よりサポート入手を期待できると考えられる接触頻度のもっとも高い別居子の属性のみを分析対象としている。

岡山県高梁市に居住する高齢女性と別居子の関係性を、別居子の男女別に検討した野邊(2006)の調査結果からは、高齢女性は息子よりも娘から多くのサポートを得られることが析出され、とくに女性の役割とみなされているサポート(身のまわりの世話)や同性に頼みやすいと思われるサポート(情緒的サポートや交遊)において、その傾向は

表 5-5 別居子の帰省頻度別にみる別居子へのサポートが期待できる割合

	【手段的】		【情緒的】	【危機的】	【介護的】
	家具の移動時	病気時	意気消沈時	災害時	老後
高頻度 (n=105)	84.4%	92.7%	78.4%	90.7%	89.7%
中程度 (n=36)	51.6%	62.5%	67.6%	76.5%	61.8%
低頻度 (n=12)	25.0%	12.5%	20.0%	40.0%	33.3%
なし (n=4)	0.0%	0.0%	25.0%	25.0%	50.0%

注：別居子が複数いる場合は、もっとも帰省頻度の高い別居子のみ算出。

表 5-6 別居子の帰省頻度別にみる別居子へのサポートが期待できる割合（性別）

		【手段的】		【情緒的】	【危機的】	【介護的】
		家具の移動時	病気時	意気消沈時	災害時	老後
息子	高頻度（n=49）	91.8%	93.9%	81.6%	93.9%	98.0%
	中程度（n=30）	50.0%	64.3%	66.7%	80.0%	60.0%
	低頻度（n=16）	42.9%	57.1%	43.8%	62.5%	46.7%
	なし（n=2）	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	50.0%
	全体（N=97）	69.9%	77.4%	70.1%	83.5%	77.1%
娘	高頻度（n=66）	81.5%	90.8%	78.8%	87.9%	84.8%
	中程度（n=22）	66.7%	86.4%	72.7%	86.4%	86.4%
	低頻度（n=5）	40.0%	60.0%	40.0%	80.0%	60.0%
	なし（n=2）	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%
	全体（N=95）	74.2%	86.2%	73.7%	85.3%	83.2%

顕著であることが指摘されている（野邊 2006:245）。一方、表 5-6 に示した本調査結果からは、別居子が高頻度で帰省する層に限って、5つのサポート課題すべてにおける息子へのサポート期待度の割合が、娘のそれを上回っていることが明らかとなった。ただし、度数が少ないことに留意したうえで、中程度層や低頻度層を概観すると、性別による差異がほとんどみられないか、あるいは娘へのサポート期待度が上回っている傾向がある。つまり、高頻度で接触する別居子へのサポート期待度における男女別比較のみ、野邊の先行研究とは異なる傾向の結果が得られたといえる⁽¹⁶⁾。

6. 世代別ソーシャル・サポート期待度

つぎに、中高年女性を世代別に区分しサポート期待度に差があるのかどうかを検討する。65歳から79歳の高齢女性は101人（47%）、45歳から64歳までの中年女性は112人（52.6%）であった。本章では4種類のサポート、5つの課題別に比較分析を試みる。なお、本稿では配偶者や同居家族以外の親しい紐帯（別居子・親戚・近隣・友人）へのサポート期待度に限定していることに留意しておきたい。また、職場仲間も親しい紐帯として取り上げられることが多いが、本調査では無職の回答者の割合が6割を超えたため（表 3-3 参照）、分析視点から除外している。さらに、質問紙の選択肢にはこれらの私的な社会関係のほかに、介護士（ヘルパー）や専門業者などの公的な社会関係も含めているが、分析は別の機会に譲ることとする。

中年女性と高齢女性がサポート入手を期待する社会関係の割合を5つのサポート課題別に算出したものが表 6-1 である。同表からは、高齢女性の別居子への高い依存傾向が読み取れる。他方で、近隣や友人などの非親族へのサポート期待度は中年女性よりも低調である。親戚へのサポート期待度でさえも、高齢女性の割合が中年女性の割合よりも下回る結果となった。興味深いのは、情緒的サポートを求める相手として友人を選んだ

表 6-1 サポート入手が期待できる社会関係の割合（世代別）

		【手段的】 家具の移動時	【手段的】 病気時	【情緒的】 意気消沈時	【危機的】 災害時	【介護的】 老後
中年女性	別居子	37.6%	40.7%	39.1%	48.2%	52.7%
	親戚	25.7%	48.1%	35.5%	54.5%	21.8%
	近隣	19.3%	21.3%	12.7%	57.3%	15.5%
	友人	26.6%	36.1%	77.3%	46.4%	14.5%
		N = 110				
高齢女性	別居子	63.4%	70.8%	61.6%	69.7%	66.3%
	親戚	18.3%	29.2%	30.3%	30.3%	19.4%
	近隣	18.3%	14.6%	22.2%	42.4%	11.2%
	友人	21.5%	20.8%	47.5%	29.3%	8.2%
		N = 99				

注：中年女性は 45 歳から 64 歳までの回答者，高齢女性は 65 歳から 79 歳までの回答者を示す。

回答者の割合が中年女性のみならず，高齢女性も比較的高いことである。ここで，老年期の友人関係の重要性にいち早く着目し，別居子関係との比較検討を試みた前田尚子（1988）の議論が想起されるが，高齢期女性の友人関係については機会を改めて検討することにしたい。

さて，表 6-1 から高齢女性の別居子への高いサポート期待度の実態が浮かび上がってきたが，これが世代の影響によるものであるかどうかをより詳細に検討するためには，各世代を別居子の有無で区別し再分析を行う必要があるだろう。表 6-2 と表 6-3 はそれぞれ，別居子のいない回答者と別居子のいる回答者のみに着目し，世代別のサポート期待度をまとめたものである⁽¹⁷⁾。同表から読み取れることを，①別居子の有無別にみた視点と，②別居子をもつ回答者を世代別にみた視点から整理しておこう。

別居子がいる場合は中年女性，高齢女性といった世代に関係なく，すべてのサポート課題において別居子を頼りにしていることが明らかである。したがって，ここでは別居子の有無による非親族へのサポート期待度の変化に着目する。別居子がない回答者は，世代を問わず親戚を頼りにすると答えた回答者の割合が，すべてのサポート課題において別居子をもつ回答者の割合を上回っている。ただし，近隣住民へのサポート期待度を比較すると，別居子のいない高齢女性の割合が別居子のいない中年女性，あるいは別居子のいる中高年女性と比べて低調な傾向がみられる。

別居子のいない中高年女性の非親族ネットワークで特に注目すべきは，友人関係であろう。即座に結論付けることはできないが，介護的サポートと高齢女性の危機的サポートを除いては，中高年女性ともに別居子をもつ回答者の割合を，別居子のいない回答者の割合が上回っている。特に高齢女性の別居子の有無による友人への情緒的サポート期待度の割合の差異は注目に値するであろう。

続いて，別居子をもつ回答者に限定して世代間の差異を検討してみよう（表 6-3）。

表 6-2 別居子のいない回答者のサポート入手期待の割合

		【手段的】		【情緒的】	【危機的】	【介護的】
		家具の移動時	病気時	意気消沈時	災害時	老後
中年女性	別居子	2.2%	4.4%	4.4%	4.4%	22.2%
	親戚	35.6%	66.7%	35.6%	62.2%	37.8%
	近隣	26.7%	24.4%	15.6%	62.2%	24.4%
	友人	35.6%	37.8%	86.7%	55.6%	13.3%
		N=45				
高齢女性	別居子	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	親戚	29.4%	55.6%	55.6%	55.6%	33.3%
	近隣	11.8%	5.6%	5.6%	38.9%	11.1%
	友人	47.1%	27.8%	83.3%	27.8%	5.6%
		N=18				

注：別居子のいない回答者のみを対象とした。

中年女性は 45 歳から 64 歳までの回答者，高齢女性は 65 歳から 79 歳までの回答者を示す。

表 6-3 別居子のいる回答者のサポート入手期待の割合

		【手段的】		【情緒的】	【危機的】	【介護的】
		家具の移動時	病気時	意気消沈時	災害時	老後
中年女性	別居子	62.5%	66.7%	64.6%	78.5%	73.8%
	親戚	18.8%	34.9%	35.4%	49.2%	10.8%
	近隣	14.1%	19.0%	10.8%	53.8%	9.2%
	友人	20.3%	34.9%	70.8%	40.0%	15.4%
		N = 65				
高齢女性	別居子	77.6%	87.2%	75.3%	85.2%	81.3%
	親戚	15.8%	23.1%	24.7%	24.7%	16.3%
	近隣	5.6%	16.7%	25.9%	43.2%	11.3%
	友人	15.8%	19.2%	39.5%	29.6%	8.8%
		N = 81				

注：別居子のいる回答者のみを対象とした。

中年女性は 45 歳から 64 歳までの回答者，高齢女性は 65 歳から 79 歳までの回答者を示す。

高齢女性の別居子へのサポート期待度に比べると，中年女性の割合はすべての課題において下回っている。これは現実には別居子からサポートを受けているか否かの差がそのまま表れていると推測できる。たとえ別居子がいたとしても，中年女性がサポートを受けている可能性は高齢女性よりも低いだろう。介護的および危機的サポートの別居子への期待度が高まっているのは，中年女性にとってどちらも現実の生活とはかけ離れたものであり，「いざというときは」といった枕詞をつけての回答であると考えられる。また，親戚関係については大差はみられないが，危機的サポートにおいては差異が確認できる。一般的に若ければ親，きょうだいをはじめとした親族は多く生存しているであろうが，年をとれば親族数は減少していくと考えられる。こうした差異が世代による親戚へのサポート期待度に影響を与えているのかもしれない。近隣関係については，危機的サポートや高齢者の情緒的サポートが少し高い割合を示しているのを除いては全体的に低調である。一方で，中年女性の友人へのサポート期待度は親戚や近隣関係に比べやや高

く、情緒的サポートに関しては、別居子への期待度を上回る結果となった。なお、高齢女性は友人への期待度がもっとも高い情緒的サポートであっても4割程度にとどまっている。

7. 考察と今後の課題

本稿の分析結果を2つの視点からまとめてみよう。まず、太秦調査では、中高年女性と別居子との帰省頻度からみた接触頻度が、別居子の性別を問わず高いことが明らかとなった。また、このような特質をもつ別居子のいる中高年女性はいかなる種類のサポートにおいても、別居子を頼りにしている傾向が強くみられた。ここで想起されるのはE. リトワクが提唱した「修正拡大家族 modified extended family」(Litwak 1985) 説である。高齢者の子どもとの同居率がきわめて低いアメリカ社会だが、高齢者は「核家族」として孤立しているのではなく、親を中心とした異居近親のネットワークによって子ども家族との日常的な交流が頻繁に行われていることを明らかにした実証研究に基づく議論である。つまり、近居型扶養を特色とする先進欧米諸国では、子どもとの同居率が高く、接触頻度も高いことが老親-子関係の特徴としてあげられる(森岡清美 1997: 142)。対する日本では、老親と子の同居率が低下しているにも関わらず、那須・湯沢の命題「日本の高齢者は同居子と親密な交流がある一方で別居子との交流が疎遠である」(那須・湯沢 1970) に端的に表れているように、修正拡大家族的親子の紐帯が脆弱であるとされてきた。宍戸は全国規模および地域単位で実施された調査から「子どもが老親に会いに来る頻度」を測定した結果を比較することで、この議論を裏付けている(宍戸 2001)⁽¹⁸⁾。

しかし、本稿では先の表5-3や表5-4で示したように、別居子とその親との地理的近接性や接触頻度の高さが認められ、修正拡大家族的親子関係が現代日本社会においても一部の地域では普及している可能性があることが示唆された。この知見を結論付けるには、別居子との近接性や接触頻度の度合いをはじめ、この現象が京都市の太秦という地域性の影響を受けているのか否かなどのさらなる詳細な検証が不可欠である。今後の課題に通ずる部分ではあるが、ひとつの仮説として確認しておきたい。

また、中高年女性を世代別に区分した比較分析については、高齢女性ほど別居子への依存が顕著になり、中年女性は別居子以外の親族や非親族へのサポートも、高齢女性に比してより期待できる傾向にある。ただし世代に関係なく、危機的サポートを除いては近隣住民へのサポート期待度は低調である。その一方で友人へのサポート期待度については高まりがみられる。とりわけ、「悩み事の相談」といった情緒的サポートを求める相手として友人を選択した中年女性の割合は顕著に高く、高齢女性も別居子以外の他の

社会関係に比べると友人を選んだ回答者の多さが際立っている。前田尚子によれば、親子関係は頼りになる半面、拘束的な関係であるのに対し、友人関係は制度的な意味合いは弱く、単なる私的な関係である。友人関係の特徴としては価値観の類似や趣味・嗜好および関心の共有、さらには同年代であることなどがあげられ（前田尚子 1988: 65）、サポートの種類によっては、別居子に頼れない場合や別居子がない場合には、親戚や近隣住民よりも付き合いやすい友人を頼る高齢者が増加しているのかもしれない。

さて、ここで今後の研究課題をまとめておこう。本調査データから見えてきた課題は数多くあるが、まずは本稿の分析結果から析出された2つの仮説の検証を直近の研究課題とする。ひとつは修正拡大家族説が太秦地域の高齢女性に本当にあてはまるのか否かである。調査方法としては訪問面接法により、別居子関係の詳細を記述していくのが妥当であろう。そして、地域性や社会背景にも焦点をあてることによって別居子関係の特性が太秦住民だけに該当するのか、あるいは都市部の郊外住民や京都市民の特性として一般化できるのか検討してみたい。

もうひとつは、中高年女性の友人関係の実態に焦点をあてた視点である。本研究からは、相対的な友人関係の重要性が示唆されただけでなく、特に別居子のいない高齢女性にとって友人は重要なサポート提供主体となっていることが明らかとなった。以上の知見から、高齢者の友人関係の構造を明らかにすることも視野に入れたい。ただし、そもそも「友人」という指標は非常にあいまいであり、その基準は個々の回答者に依拠しているため、近隣住民との重複なども想定されうる可能性がある点には留意が必要である。そのうえで、高齢女性がどのような関係性にある人を主観的に「友人」と認識しているのかを把握することも重要であると考えられるだろう。

さいごに、長期的な課題を書き留めておこう。それは、本稿で着目した別居子、親戚、近隣、友人関係に限らず、職場仲間や他の公的な社会関係にも目を向けたパーソナル・ネットワークの都市間比較の実施である。すでに実証研究の蓄積はあるが、大都市の都心部やその郊外、地方中核都市、その周辺地域、あるいは農山漁村など、それぞれの地域特性や時代の変化なども考慮すれば、ネットワーク研究に終わりはない。今後はさまざまな属性の人々に目を向ける必要があるだろうし、その対象を限定する場合でも、個人属性は非常に多様であることを念頭におかなければならない。そうすれば、画一的な質問紙によるネットワーク測定の限界性を踏まえたうえでの、量的調査と質的調査の組み合わせが不可欠であることが自ずと見えてくる。こうした地道で丁寧な実証研究を積み重ねることで、各地で生活する人々の実態に即したパーソナルな社会関係の構造を一つひとつ紐解いていきたい。

謝辞

突然の質問紙調査にもかかわらず、調査の主旨を理解し貴重なお時間を割いてくださった太秦学区住民のみなさまに、深い感謝の意を表します。

注

- (1) 65歳以上の単身世帯の増加は男女ともに顕著であり、2010（平成22）年には男性約139万人、女性約341万人で高齢者人口に占める割合は男性11.1%、女性20.3%である。また、65歳以上の高齢者のいる世帯を世帯構成別にみると、夫婦のみ世帯が最も多く、単身世帯と合わせると、半数を超える状況である（内閣府 2015）。
- (2) 高齢者自身が家族や親族との交流を含んだライフスタイルをいかに主体的に選択しながら営んでいるのかを追及する視点（安達 1999: 24）。
- (3) 個人と個人の関係や個人と集団、あるいは組織との関連性を総称した「社会的ネットワーク」の低位概念として位置づけられ、特に人と人との親しい紐帯を表現する場合に用いられる（森岡清志 2012）。同居家族をはじめとした、親族、近隣住民、友人、職場の上司や同僚などは、人々の日常生活を支える社会関係であり、「パーソナル・ネットワーク」とはこれらの関係性の総称である。
- (4) 「ソーシャル・サポート（社会的支援）」は多義的で、研究者によって異なる定義が付与されてきた。欧米で先行した研究群の個々の定義を概観した野口は T. C. アントヌッチ（Antonucci, T. C. 1985 *Personal Characteristics, Social support, and social behavior*. In Binstock, R. H. and Shanas, E. *Handbook of aging and social sciences*, 2nd edition, Van Nostrand Reinhold, New York）が示した包括的でゆるやかな定義「援助（aid）、感情（affect）、肯定（affirmation）を主要な要素として含む対人交流」を踏まえて、現段階では各操作的定義の位置やその限界性を明示することが重要であると述べている（野口 1991 参照）。
- (5) たとえば、山下亜紀子「農村高齢者の福祉サポート資源への期待－青森県黒石市六郷地区の調査分析をもとに－」『村落社会研究』No.8(1): 47-58 や、原（福与）珠里「農村における高齢女性のパーソナル・ネットワークに関する考察－京都府美山町の地域おこし活動に関与する女性を事例として－」『村落社会研究』No.11(1): 43-53 などがある。
- (6) 「学区」は小学校区を示している。
- (7) 「太秦」という名の由来は大和時代以降、朝鮮半島から渡来した秦氏が関係しているなど、そのルーツは長い京都の歴史のなかでも特に古い。葛野郡「太秦村」が明治7年に誕生するが、当時はその大部分が沼地であり、1931（昭和6）年に新たな行政区である「右京区」の一部として京都市に編入され区画整理が進むまでは、広大な田畑に住居が点在している状況であった（林屋 1971 参照）。
- (8) 京都市が2003（平成15）年から2008（平成20）年までの間に実施した「太秦東部地区第一種市街地再開発事業」のこと。主な事業内容は、①京都市営地下鉄東西線の西伸に伴う太秦天神川駅周辺の整備、②右京区総合庁舎や地域体育館、図書館などの公共公益施設、分譲住宅などを収容する複合施設の建設である（京都市情報館 京都市ホームページ 2015年9月21日最終閲覧 <http://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/page/0000004355.html>）。
- (9) 「平成27年版高齢社会白書」によると、高齢者人口は2014（平成26）年10月1日現在、男性1,423万人、女性1,877万人で男女比はおおよそ3対4となっている。また、平均寿命は2013（平成25）年現在、男性80.21年、女性86.61年である（内閣府 2015）。
- (10) 松本（1995: 80）によると、空間的制約の少ない男性は、職場・出身高中心の閉じたネットワークを、制約の多い女性は、近隣、子供の学校など出会いの文脈を多様化させて、分散的なネットワークをそれぞれ形成する傾向がみられる。しかし、その効果は諸個人が生態学的な構造と社会構造において占める位置によって異なり、制約の大きいグループ（既婚女性、母親、高齢者、社会経済的地位の低いものなど）は「場所に根差したネットワーク」を、制約の少ないグループ（男性、若者、社会経済的地位の高いものなど）は「場所を越えたネットワーク」を形成しがちである。
- (11) 選挙人名簿には、マンション名および部屋番号の記載がないため、マンションに居住する対象者についてはマンション名および部屋番号が記載されている住民票から抽出した。

- (12) 3 次元は、ソーシャル・サポートの概念に内包されている「認知的主観的側面」と「行動的客観的側面」の測定において必要な区別であり、それぞれ「あるサポートをしてくれそうなのか」(予期)、「実際にしてもらったのか」(実績)、「それをどう思っているのか」(評価)に分けられる(野口 1991: 39)。
- (13) 千里ニュータウン調査: 対象者は選挙人名簿から抽出された大阪府豊中市千里ニュータウンの戸建および分譲マンション地域に居住する 45 歳以上 80 歳未満の女性 521 人である。有効回答率 36.9% (西川 2014)。
- 足助調査: 対象者は選挙人名簿から抽出された愛知県豊田市足助町の北部と東部に居住する 45 歳以上 80 歳未満の女性 470 人である。有効回答率 49.0% (前田瑠依 2014)。
- (14) 別居子が老親の同一町内や同一学区内に居住しているのと、同一市内ではあるが車で片道 30 分以上を要するところでの居住では接触頻度やサポート期待度にかかなりの差異がでることが予想される。にもかかわらず、本調査票では別居子の現住地を尋ねる項目の選択肢として「近隣地域」を設けなかったために本当の意味での近居なのか、あるいは遠居とまではいえないが、京都市内の他学区なのかの判断ができない点には留意する必要があるだろう。
- (15) 別居する息子の現在の居住地と実家への帰省回数の相関係数は 0.688 ($p < 0.01$, $N = 106$) で、娘の現在の居住地と実家への帰省回数の相関係数は 0.210 ($p < 0.05$, $N = 103$) であった。
- (16) 高齢女性にとって、同性であり、情緒的なつながりが息子に比してより強いと考えられる娘にサポートを依頼しやすいという傾向は、野邊 (2006) に限らず、すでに実証されている(横山ほか 1994)。では、本調査が示す高齢女性の息子へのサポート期待度の高さはなぜだろうか。ひとつの可能性として、実際のサポート提供主体が「息子の嫁」であることが考えられるかもしれない。本稿の調査データから得られた、「帰省回数の多い別居子は現住地も近接している傾向にある」といった知見から考察すると、男性の別居子が比較的近居する場合、その親である中高年女性は、息子よりも息子の嫁から日々の生活のサポートを期待できる、あるいは実際に得ていることもありうるのではないだろうか。高齢女性を支えるサポート提供主体として「嫁」の存在については、機会を改めて焦点をあててみたい。
- (17) 表 6-2 からは、45~64 歳の回答者で別居者がいないにも関わらず、サポート期待の相手として別居者を選択している人が「家具の移動時」と「意気消沈時」は 1 人ずつ、「病気時」と「災害時」は 2 人ずつ、そして「老後」は 10 人確認できる。これらの回答者の家族構成では未婚子との同居がみられたため、回答者は未婚子が将来他出した後のことを考慮して「別居者」を選択したと筆者は推測する。しかし、本稿の分析ではこれらをゼロとして考察を進めている。
- (18) 1968 年から 1990 年代までの「子供が老親に会いに来る頻度」を、それぞれ 1968 年:『厚生白書』1970 年版, 1973 年:『図説家族問題の現在』1973 年版の全国調査, 1991 年:『老人の生活と意識』1992 年版, 1992 年:『兵庫県家庭問題研究所』の 1992 年報告書より、各年のデータを比較し「老親と別居子の接触頻度」としてグラフ化したうえで、この期間の老親-子間の接触頻度の動向に大差がみられないことを指摘。すべての年で接触頻度が最も高い数値を記録したのは「年数回」で 4 つの年の平均は 36.65%, 次いで「月 1 回以上」は 27.78% となっている(矢戸 2001: 139-140)。

参考文献

- 鯉坂 学 2008「京都の伝統産業と『まち』の移り変わり」鯉坂 学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』世界思想社
- 鯉坂 学 2009『都市移住者の社会学的研究』法律文化社
- 安達正嗣 1999『高齢期家族の社会学』世界思想社
- 安達正嗣 2010「高齢期家族研究のパースペクティブ再考-『家族』から『家庭』再構築へ」『家族社会学研究』No.22(1): 12-22
- Fischer, C. S. 1982 *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, The University of Chicago Press (=2002 松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らす-北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社)

- Gans, H. J. 1962 *Urbanism and Suburbanism as Ways of Life: A Reevaluation of Definitions*, in Rose, A. M. *Human Behavior and Social Processes*, Boston: Houghton Mifflin, pp.625-648 (=2012 松本 康訳「生活様式としてのアーバニズムとサバーバニズム」森岡清志編『都市社会学セクション2 都市空間と都市コミュニティ』日本評論社 pp.59-87)
- Granovetter, M. S. 1973 *The Strength of Weak Ties*, *American Journal of Sociology* 78(6): 1360-1380 (=2006 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編『リーディングスネットワーク論-家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房 pp.123-154)
- 林屋辰三郎編 1971『京都の歴史9 世界の京都』京都市
- 金子 勇 1993『都市高齢社会と地域福祉』ミネルヴァ書房
- 京都市総合企画局情報化推進室情報統計担当 2015「京都市の高齢者人口-平成27年『敬老の日』にちなんで」『統計解析 No.73』
- 県別マップル 2015『京都府道路地図』昭文社
- 厚生労働省大臣官房統計情報部編 2014『グラフでみる世帯の状況-国民生活基礎調査(平成25年)の結果から』
- 小松秀雄 2008「祇園祭の山鉾町のアフターネットワークと実践コミュニティ」鯉坂 学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』世界思想社
- Litwak, E. 1985 *Helping the Elderly: Complementary Roles of Informal Networks and Formal Systems*, New York: Guilford Press.
- 前田尚子 1988「老年期の友人関係-別居子関係との比較検討」『社会老年学』No.28: 58-70
- 前田尚子 1992「非親族からのソーシャル・サポート」折茂肇編『新老年学』東京大学出版会
- 前田瑠衣 2014「現代における中高年女性のパーソナル・ネットワーク-千里ニュータウンと愛知県豊田市足助町の比較から-」同志社大学社会学内社会学会『Sociology 2014年号 社会学部社会学科2013年度卒業生卒業論文集』pp.7-50
- 森岡清志 2000『都市社会のパーソナル・ネットワーク』東京大学出版会
- 森岡清志 2012『パーソナル・ネットワーク論』放送大学教育振興会
- 森岡清美 1997「老親の扶養」森岡清美・望月嵩『新しい家族社会学四訂版』培風館
- 内閣府編 2015『高齢社会白書(平成27年版)』日経印刷株式会社
- 那須宗一・湯沢雅彦編 1970『老人扶養の研究』垣内出版
- 西川由希子 2014「都市と農村のパーソナル・ネットワーク-大阪府豊中市と愛知県足助町を比較して-」同志社大学社会学内社会学会 前掲書 pp.51-85
- 野口裕二 1991「高齢者のソーシャル・サポート: その概念と測定」『社会老年学』No.34: 37-48
- 野沢慎司 2008「選択的ネットワーク形成と家族変動」『家族社会学研究』No.20(1): 38-44
- 野邊政雄 1997「地方都市における高齢女性の社会的ネットワーク」『日本都市社会学年報』No.15: 83-100
- 野邊政雄 2006『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』御茶の水書房
- 奥田道大 1993『都市と地域の文脈を求めて-21世紀システムとしての都市社会学』有信堂高文社
- 大谷信介 1995『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク-北米都市理論の日本的解説』ミネルヴァ書房
- 穴戸邦章 2001「高齢期パーソナル・ネットワーク研究における分析視点の動向-1990年を境として-」『同志社大学社会学研究』No.5: 135-146
- 田中志敬 2008「京都の地域コミュニティと地域運営アソシエーション-町内・町内会と元学区・自治連合会」鯉坂 学・小松秀雄編『京都の「まち」の社会学』
- 上田 篤編 1976『京町家・コミュニティ研究』鹿島出版会
- Wellman, B. 1979 *The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers*, *American Journal of Sociology* 84(5): 1201-1231 (=2006 野沢慎司・立山徳子訳「コミュニティ問題-イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司編 前掲書 pp.159-200)
- Wirth, L. 1938 *Urbanism as a Way of Life*, *American Journal of Sociology* 44(1): 1-24 (=1965 高橋勇悦訳

- 「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房 pp.127-147)
- 安河内恵子 2008「高齢化と地域社会」森岡清志編『地域の社会学』有斐閣
- 安田 雪 2011『パーソナルネットワークー人のつながりがもたらすもの』新曜社
- 横山博子・岡村清子・松田智子・安藤孝敏・小谷野亘 1994「老親と別居子の関係ー団地に居住する女性老人の場合ー」『老年社会科学』15(2)：119-123

参考 URL

- 豊田市役所総務部庶務課 2015「豊田市の人口」豊田市ホームページ（2015年10月5日取得 <http://www.city.toyota.aichi.jp/shisei/tokei/1008302.html>）

【資料】

「住民相互の助け合いに関する実態調査」調査票（単純集計表付き）

*「NA/DK」は無回答，わからない。

*自由記述等は省略した。

住民相互の助け合いに関する実態調査（2014年8月）

同志社大学 鯉坂研究室

[ご記入にあたって]

それぞれ該当する番号に○をつけてください。問いによっては、() 内に該当する内容をご記入ください。

◆お住まいの地域（町内）におけるお付き合いについてお聞きます。

問1 ご近所付き合いについてお聞きます。お住まいの地域（町内）の住民で、あなたがお付き合いしている方がいるかどうか、項目ごとにお答えください。

（それぞれ「いる」「いない」のうち1つだけ○をつけてください。）

（単位：％）

	1. いる	2. いない	NA/DK
挨拶をする程度の方	95.6	1.3	3.1
世間話をする程度の方	85.5	10.6	4.0
おすそ分けをしたりされたりする方	74.4	22.0	3.5
相談や頼みごとをする方	59.5	36.6	4.0
家に遊びに行ったり、来たりする方	50.2	45.2	4.4

N=217

問2 職場の外で、あなたやあなたの配偶者の職場の方と、あなたはどれくらいの回数つき合っておられますか。（1つだけ○）をつけてください。

1. 週に1回以上 2.6% 2. 月に2.3回 9.7% 3. 月に1回 6.6%
 4. 年に数回 23.3% 5. ほとんど会わない 45.4% 6. その他 () 1.0%
 NA/DK 7.0% N=201

問3 あなたやあなたの配偶者の親戚の方（ご両親や兄弟姉妹含め）と、あなたはどのくらいの回数つき合っておられますか。（1つだけ○）をつけてください。

1. 週に1回以上 11.9% 2. 月に2.3回 18.5% 3. 月に1回 15.0%
 4. 年に数回 42.7% 5. ほとんど会わない 9.3% 6. その他 () 1.3%
 NA/DK 1.3% N=224

問4 職場、親戚、近所の人たち以外の知人を友人とします。あなたは友人の方とどれくらいの回数つき合っておられますか。（1つだけ○）をつけてください。

1. 週に1回以上 10.6% 2. 月に2.3回 23.3% 3. 月に1回 16.7%
 4. 年に数回 33.5% 5. ほとんど会わない 15.4% 6. その他 () 0%
 NA/DK 0.4% N=226

問5 あなたがこの土地に住み続けていくうえで、たよりにできると思われるのは次のうちのどれですか。(3つまで選び○をつけて下さい。)

- | | | | |
|----------------------|-------|------------------|-------|
| 1. 同居している家族 | 81.9% | 7. 農協 | 0.4% |
| 2. 親戚・親類 | 43.2% | 8. 右京区役所（その職員など） | 10.6% |
| 3. 家から他出している家族（息子や娘） | 55.9% | 9. 介護士・ホームヘルパーなど | 5.3% |
| 4. 隣近所・町内の人 | 44.5% | 10. その他（ ） | 0.4% |
| 5. 町内会・自治会 | 9.7% | | |
| 6. 連合町内会 | 0.9% | | |
- N = 227

問6 あなたは日常生活の中でどんなときに生きがい、楽しさを感じますか。(いくつでも○をつけて下さい。)

- | | | | |
|-------------------------|-------|---------------|-------|
| 1. 勤め先の仕事がうまくいった時 | 5.6% | 6. 良い作物がとれた時 | 4.4% |
| 2. 地域の人たちと話やスポーツをしている時 | 24.2% | 7. 趣味を楽しんでいる時 | 61.7% |
| 3. 友人との団欒やレジャーを楽しむ時 | 59.9% | 8. テレビを見ている時 | 31.7% |
| 4. 同居の家族との団欒の時 | 60.4% | 9. その他（ ） | 6.2% |
| 5. 他出している娘・息子や孫が帰省してきた時 | 47.1% | NA/DK | 6.2% |
- N = 213

◆次のような場合の「助け合い」についてお聞きします。

問7 たとえば、家具の移動など一時間くらいの手助けが必要なとき、同居家族以外では、次の誰に頼みますか。(あてはまるものにいくつでも○を付けてください。)

- | | | | | | |
|---------------|-------|------------|-------|--------------|-------|
| 1. 他出している息子や娘 | 44.1% | 2. 親戚 | 20.3% | 3. 近所の人たち | 18.1% |
| 4. 職場の人たち | 2.6% | 5. 友人 | 22.0% | 6. 介護士（ヘルパー） | 0.9% |
| 7. 専門業者 | 26.4% | 8. 右京区役所の人 | 1.3% | 9. その他（ ） | 2.2% |
- NA/DK 8.8% N = 207

問8 もしあなたが病気で2週間寝込んだとします。この時、手助けを期待できるのは同居家族以外では、次の誰でしょうか。(あてはまるものにいくつでも○を付けてください。)

- | | | | | | |
|---------------|-------|------------|-------|--------------|-------|
| 1. 他出している息子や娘 | 49.3% | 2. 親戚 | 36.1% | 3. 近所の人たち | 17.2% |
| 4. 職場の人たち | 2.2% | 5. 友人 | 26.0% | 6. 介護士（ヘルパー） | 11.5% |
| 7. 専門業者 | 9.3% | 8. 右京区役所の人 | 1.3% | 9. その他（ ） | 1.3% |
- NA/DK 7.9% N = 210

問9 もし、あなたが落ち込んだり、意気消沈し、そのことを誰かに話をしたい場合、手助けを期待できるのは同居家族以外では、次の誰でしょうか。(あてはまるものにいくつでも○を付けてください。)

- | | | | | | |
|---------------|-------|------------|-------|--------------|-------|
| 1. 他出している息子や娘 | 46.3% | 2. 親戚 | 31.7% | 3. 近所の人たち | 17.2% |
| 4. 職場の人たち | 11.9% | 5. 友人 | 59.9% | 6. 介護士（ヘルパー） | 1.8% |
| 7. 専門業者 | 2.6% | 8. 右京区役所の人 | 3.7% | 9. その他（ ） | 2.2% |
- NA/DK 5.3% N = 215

問 10 震災，台風，災害時，手助けを期待できるのは次の誰でしょうか。（あてはまるものにいくつでも○を付けてください。）

- | | | | | | |
|---------------|-------|------------|-------|--------------|-------|
| 1. 他出している息子や娘 | 54.2% | 2. 親戚 | 41.0% | 3. 近所の人たち | 48.0% |
| 4. 職場の人たち | 6.2% | 5. 友人 | 35.7% | 6. 介護士（ヘルパー） | 3.1% |
| 7. 専門業者 | 15.9% | 8. 右京区役所の人 | 16.7% | 9. その他（ ） | 2.6% |

NA/DK 5.3%

N = 215

問 11 年をとって（老後），体がきかなくなった場合，手助けを期待できるのは同居家族以外で，次の誰でしょうか。（あてはまるものにいくつでも○を付けてください。）

- | | | | | | |
|---------------|-------|------------|-------|--------------|-------|
| 1. 他出している息子や娘 | 54.6% | 2. 親戚 | 19.8% | 3. 近所の人たち | 12.8% |
| 4. 職場の人たち | 0.4% | 5. 友人 | 11.0% | 6. 介護士（ヘルパー） | 54.6% |
| 7. 専門業者 | 22.5% | 8. 右京区役所の人 | 14.1% | 9. その他（ ） | 0.9% |

NA/DK 6.2%

N = 213

問 12 あなた・あなたの世帯は町内会・自治会に入っておられますか。

- | | | | | | |
|-------|-------|--------|------|-------|------|
| 1. はい | 89.4% | 2. いいえ | 4.4% | NA/DK | 6.2% |
|-------|-------|--------|------|-------|------|

N = 213

問 13-1 あなたのご出身地（主に 10 代をすごした所）はどこですか。

- | | | | | | |
|----------|-------|-----------|-------|---------|-------|
| 1. 太秦学区内 | 7.9% | 2. 右京区内 | 10.6% | 3. 京都市内 | 28.6% |
| 4. 京都府内 | 11.9% | 5. その他（ ） | 35.2% | NA/DK | 5.7% |

N = 214

問 13-2 あなたのご主人のご出身地（主に 10 代をすごした所）はどこですか。

- | | | | | | |
|----------|------|-----------|-------|---------|-------|
| 1. 太秦学区内 | 8.8% | 2. 右京区内 | 8.8% | 3. 京都市内 | 33.5% |
| 4. 京都府内 | 9.3% | 5. その他（ ） | 28.6% | NADK | 7.9% |

N = 202

問 14 あなたは今の住所にどれくらいお住みですか。[] 年

- | | | | | | |
|--------|-------|---------------|-------|---------------|-------|
| 3 年未満 | 5.3% | 10 年未満～20 年未満 | 30.4% | 20 年以上 40 年未満 | 35.7% |
| 40 年以上 | 22.5% | NA/DK | 6.2% | | |

N = 213

問 15 あなたのお住まいの住宅は次のどれにあたりますか。

- | | | | |
|----------------|-------|----------------------|-------|
| 1. 持ち家（一戸建て） | 75.8% | 2. 持ち家（マンションなど） | 15.0% |
| 3. 民間の借家（一戸建て） | 2.2% | 4. 民間のアパート・マンション（賃貸） | 0.9% |
| 5. 市営・府営住宅（賃貸） | 0% | 6. 公団公社住宅・UR など（賃貸） | 0% |
| 7. 社宅・公務員住宅 | 0% | NA/DK | 6.2% |

N = 213

問 16 あなたの年齢は何歳ですか。[] 歳

- | | | | | | | | | | |
|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|
| 40 代 | 11.9% | 50 代 | 23.8% | 60 代 | 32.6% | 70 代 | 30.0% | NA/DK | 1.8% |
|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|

N = 223

問 17 あなたは現在結婚しておられますか。

1. 結婚 82.8% 2. 死離別 10.6% 3. 未婚 3.1% NA/DK 3.5% N = 219

問 18 あなたのお仕事は次のうちどれにあたりますか。(主なもの 1 つに○印をつけてください。)

1. 会社役員 0.9% 2. 会社員 5.7% 3. 公務員 1.3%
 4. 会社員・公務員以外の正職員 0.9% 5. 自営業 10.1%
 6. パート・アルバイト 22.5% 7. 無職 25.6% 8. 年金生活者 27.3%
 NA/DK 5.7% N = 214

問 19 現在の住宅に同居しているご家族は何人ですか。[] 人

1 人 7.5%, 2 人 39.2%, 3 人 26.0%, 4 人 13.7%, 5 人 6.2%, 6 人 0.9%, 7 人 0.9%
 NA/DK 5.7% N = 214

できれば、その方たちの続柄などを教えてください。(氏名は必要ありません。)

单身 7.5% 夫婦のみ 36.1% 夫婦と未婚氏 35.2% 二世帯 6.2%
 多世代 7.0% その他 1.8% NA/DK 6.2% N = 213

問 20 他出している息子さんや娘さんは何人ですか。[] 人

0 人 28.2% 1 人 30.8% 2 人 27.8% 3 人 8.8% 4 人 1.8%
 5 人 0.4% NA/DK 1.8% N = 222

できれば、その方たちの続柄なども教えてください。(氏名は必要ありません。)

〈続柄〉

長男 41.4% 長女 41.9% 長男以下 21.6% 長女以下 16.8% NA/DK 1.8%

現在地

(単位: %)

	京都市内	京都府内	近畿圏内	関東地方	その他	NA/DK
長男	21.1	2.2	6.6	7.5	4.0	1.8
長女	26.0	2.2	7.0	4.0	2.6	
長男以下	10.2	1.3	3.9	3.9	2.6	
長女以下	11.5	0.0	3.1	2.9	6.8	

問 21 これらの他出している息子さんや娘さんは、お宅に年間どれくらい、どんな用件で帰って来られますか。

帰郷回数

(単位: %)

	10 回以上	5 回以上	3~4 回	2 回くらい	年に 1 度	ほとんど帰らない	NA/DK
長男	21.1	4.4	6.6	6.6	1.8	0.9	1.8
長女	25.1	6.2	5.3	2.6	1.8	0.9	
長男以下	8.3	2.2	5.2	3	0.4	0.9	
長女以下	10.1	2.2	2.6	0.9	0.9	0	

帰省用件

(単位：%)

	様子を見に	病気の見舞いに	遊びに	その他	NA/DK
長男	18.1	3.1	28.2	16.3	1.8
長女	17.2	3.5	27.3	9.7	1.8
長男以下	10.5	1.7	12.3	10.8	1.8
長女以下	10.0	3.1	13.1	4.4	2.2

回答はこれで終わります。 ご協力ありがとうございました。

返信用封筒に入れて、9月5日（金）までにポストにご投函下さい。

◇来年の4月にはこの調査の報告書を作成する予定です。

送付ご希望の方はお名前・ご住所をお書きください。

お名前：

ご住所：〒

Personal Networks of Women in the Late Middle Age Stage Relationships with their Adult Children Living Separately

Eri Yoshida and Manabu Ajisaka

The purpose of this study is to investigate personal networks of middle-aged and elderly women, and explore relationships they have with their adult children living separately. More particularly, the adult children living separately from their parents have been seen to play important in supporting life of middle-aged and elderly women in Japan. We have collected data for this study through a questionnaire survey in Uzumasa district of Kyoto, Japan. There were 227 valid responses from women aged 45 to 79 years. Personal relationships were measured and analysed in terms of instrumental, emotional, crisis and care support.

The major findings were as follows : (1) The distance between current place of residence of adult children and their parents is relatively close and they tend to maintain frequent contact. Importantly, this tendency was not dependent on the gender of children. (2) Middle-aged women and especially those over 65 years old have extremely high expectations towards their adult children living separately rather than relying on other informal networks and support from non-relatives.

Key words : Personal Network, Middle-aged and Elderly women, Social support, Ukyoku-Kyotoshi